

法然上人の學風

小西存祐

一

茲に學風といふは、たゞルーズに、上人の佛教研究に對する觀點なり、態度なりを引つくるめて爾か稱したのである。觀點といへば、自分はそれについて、ひとつ想ひ起すことがある。それは、確か大正の初頃のことだつたと思ふが、故權田雷斧僧正が、高野へ登られる途上、是も今は故人となつた三長覺靜君を伴つて、拙者の寺で一泊をせられたことがあつた。

當時自分の寺(大阪城南)は、勿論まだ焼けてはゐなかつたので、二間の大床の一方に、木身乾漆で高さ參尺餘寸もある、極めて素朴な聖觀音のお像(立像)を壹躰据へてゐた。

僧正がその座敷へ這入つてこられると、いきなりそのお像に目を着けられ、フ、ウ是りやなか／＼見ごとな觀音ぢやないか、いつた、い、何ふしたのか——とお尋に、その來歴などを詳しく物語つた後、時に僧正このお像は、僕もこれで相當なものだと思つてゐますが、何ふもアのお目のところが、少しく釣りすぎて、聊か權衡が採れてゐないやうにも思ひますがと、お尋をすると、僧正はすかさず、そりや君、見方が悪いんだよ、これで是のお像を、適當な壇上に安置し、それを下から若干の間隔を置いて眺めてみると、決して目は釣つたことにはならない、佛師はちやんとその邊のことを勘定にいられて製作してゐるんだ——との説明に、成程！と感心した事がある。

さういふ風で、物には何んでも觀點といふものがある。富士山を見るにしても、あれをアノ田子の浦なり、蘆ノ湖の湖畔なりから眺めてこそ、そこにその趣といふものが出てくる。勿論それも、その時の目的の如何にも由ることではあるが、假りにそれを、飛行機にでも乗つて、天邊から見降したとしたら、どんなものであらふ。その殺風景は、改めて云ふを要しないであらふ。

二

今ま上人が、何ういふ觀點から、佛教を見てゐられたかといふに、それは「自分」——それも、ありうべき自分ではなくて、現にあるところの——即ち現實の自分といふものに觀點を置いて、佛教を觀てゐられた。

十六門記によると、承安五年三月、上人が四十三歳で善導の觀經疏の「一心專念」の文を發見された當時の光景を述べて——歡喜のあまりに聞人なかりしかども、予が如の下機の行法は、阿彌陀ほとけの法藏因位の昔、かねて定置るゝをやと、高聲に唱て、感悅髓に徹り、落涙千行なりき——といふ様に申してゐる。

同様のことは、亦た親鸞上人にをいても傳へられてゐる。上人が第十八願の願文に「十方衆生」とあるを、全く自分一人のために誓はれたのだと觀られたと云ふのも、また同じ心もちから來てゐる。

宗義の上で、時機相應といふことが八釜しく強調されてゐるのも、實にこの觀點からくる結果である。

三

次に研究の態度であるが、これは先づ第一にその實踐的な態度を擧げなければならぬ。それは上人が佛教を判釋するのに、聖淨二門とか難易二道とか漸頓二教とかいつた範疇カテゴリーに據つてゐられたことから見ても、能く解かると思ふ。

もつとも佛教は、印度の學問的な影響を多分にうけて、頗る哲學的な色彩に富んではゐるが、併し佛教は、飽く迄も宗教であり生活道であつて哲學ではないのであるから、その研究が、自然に實踐的になるのは、寧ろ當然なことである。

が、併し、上人の前後に現れた多くの祖師が、佛教を觀るのに、佛の眞意が那邊に在つたか、又その教理が淺いかか深いかか、——即ち權實とか偏圓とかいつたことに重點を置いて、佛教を見てゐられたことを思合はして見ると、上人の實踐意識が、その出發から如何に強烈であつたかといふことを想見することが出来る。

又この實踐的態度に伴つて、修行の規範レギュラを出來うるだけ簡單に、而かも内容の豊富なものにしたといつた要求が、自然に湧いてくる。そこで上人も、淨土の行法を三段の節にかけて、先づ第一段に聖道門を選捨し、次に雜行を、次に助業をと漸次に批判に批判を加へ、斯くして最後に残つた選擇本願の念佛を、而かも一筋に貫いて往かふといふ、謂はゆる一向專念主義を強調せられた。

是は上人の偏依の師であつた善導大師ですら實際には、助正兼行の態度を採つてゐられたのに對して、上人が念佛の一本槍で、徹底した專念主義であつたといふことは、特に注意をして置く必要がある。

四

それからこの專念主義は、そのまゝ夫れが、わが國民の國民性とも合致してゐたといふことを、最後に一言つけ加へて置きたいともふ。

由來わが國民は、何ごとにも言擧げすることを餘まり好まないといつた傾向をもつてゐた。是は短歌、俳句を始め、その他いろ／＼な事物の上に、その現はれを見ることが出来るが且らくその一例として、わが國の文字について述べて見ることにしやう。

今日わが國で使用されてゐる文字には、勿論いろ／＼なものがあるが、その中、國民性とか民族性とかいつたものを、最も能く表はしてゐるものは、なんといつても平假名であると思ふ。

平假名は漢字から變化したもので、漢字の書體には楷書、草書、行書等がある。楷書は文字の約束に従つて、一點一

劃も苟もしないといふ書体で、謂はと袴を着けた形である。それが浴衣がけとなり、丹禪に碎けた姿が草行のそれである。そしてそれが、更らに一段と碎けてくると、今の謂はゆる平假名といふものに成つてくる。

世間では、草書行書は楷書を畧したものだといふ様に言つてゐるが、それは間違つてゐる。是は畧したのではなくその中へ込めたのである。古來、草行を旨く書かふとするには、その前提として、先づ楷書を充分習込むといふことが必要だとされてゐるのも、實にその理由から來てゐる。

今ま上人の念佛が、亦た夫れと同様である。それで三重の飾にかけて、本願以外の行法を拂ひのけたと云ふと、一見口稱已外の餘行を排斥し去つたかのようにあるが、實際は拂ひのけたのではない、その中へ込めたのである。夫れゆへ二祖上人は、その念佛の意義を、眞に理解しやうとするには、聖淨兼學の人でなければならぬといふことを申してゐられる。是はわが國の喰道樂が、いろ／＼と御馳走を食べ飽いた後でない、眞にお茶漬の旨さを解することが出来なると言つてゐるのと同一である。

要之、上人の學風は、理論よりは實踐、分析よりは綜合、遠心よりは求心といつたことになると思ふが、更らにそれを要約すると日本的であつたとしても言へば、大体その輪廓を捉へることが出来ると思ふ。

尙ほ上人の學風については、述べべきことが無いでもないが、今は且らくこの邊で筆を擱くことにする。